

Title	大都市の人口学的考察の限界
Sub Title	
Author	奥井, 復太郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1932
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.26, No.11 (1932. 11) ,p.2215(1)- 2254(40)
JaLC DOI	10.14991/001.19321101-0001
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19321101-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

宮内省御用達

株式會社 東洋軒

電話三田 三五八〇
三五八二
三五八二

東洋軒支店

- 新橋驛階上 電話銀座四七〇
- 三信ビルヂング地階並三階 電話銀座三八六八
- 帝國劇場内 電話丸の内一七二二
- 新橋演舞場内 電話銀座二七二八
- 列車食堂東京事務所 電話丸の内一六六三
- 赤坂三會堂内 電話青山九
- 赤坂錦水 電話赤坂九二一

三田學會雜誌

第二十六卷

第十一號

大都市の人口學的考察の限界

奥井復太郎

人口學的考察は都市構成に關する研究中最も古く且つ重要なものであつた。都市の形體中殊に其の大サは常に人口の多寡を以つて測定された。大都市現象は主として、人口の都市集中として觀られた、従つて都市の人口動態が注意された。しかし人口學的には、人口は單なる數として現はれて來ない。統計上に現はれる何十萬人、何千何百人等の數字を構成する人口計算に於ける單位は、要するに單純平等無異無味の人間一匹である。唯人口統計は、之れに性別年齢別等の區別を與へる。更に人口動態、即ち人口の増減、移動及び其等の原因、出生、死亡、その比率、出入移民等の關係又は比率等、更に死亡原因に關する統計等を掲げる。

大都市の人口學的考察の限界

是等の調査と研究とは、都市研究上に於いて資する所が少くなかつた、否、現在に於いても、後段に述べられるであらう様に、都市現象に關して従來行はれた種々の所謂法則又は學說の有效性を吟味するに役立つてゐる事は疑ふ可くもない。しかし純然たる人口學的研究の貢献も、或る限られたる範圍以上に出る事は出来ない。既に其の統計的調査に當つては政治上なり經濟上なり又は社會上の諸前提に依る所極めて大なのである。純粹數理的な考究を別にしては、人口學は常に經濟學、社會學、政治學、地理學など、相據つてのみ其の効果を上げてゐる。

茲に於いてか、都市現象を理解する便宜上、此の人口學的統計的方法がどれだけ役立つてゐるかの問題が生じて来る。筆者は此の方法の有する大なる効果を疑ふものではないが、現在の都市研究にあつては、此の方法は次序的の性質のものではないかと思ふ。次序的と云ふのは、都市現象に關する、他の方法によつて定められた學說又は定理の有効性を是正するか、或ひは、此の人口學的統計的に得られた結論に對しては、他の方法によつて求めらる可き解説がなくしては、換言すれば此の方法獨自では左まで重要な意義を持ち得ないと云ふ事を意味する。

多數の人間が比較的狭い地域に群居して生活してゐる。之れを人口學的に取扱ひ、之れを統計的に効果あらしめる。既に「地域」に於いては、政治的、經濟的、社會的前提の示す決定に基いてゐる。而して其の研究の結果所謂人口統計が成立した。此の際、例へば數百萬人の巨大な人口集團が數字的に表示された。性別、年齢別による關係が比率的に調査された、人口動態の關係が闡明された。成程、之れによつて、數個の結論が引き出される。曰く「數百萬の集中的人口集團は、何處にでも在ると云ふ存在ではない、世界的に極めて僅かな存在である」と。曰く「性別

人口中男性人口に對する女性人口の比率は都市に於いて大である」と。曰く「都市人口の増加は市民の自然的増加よりも外部よりの移住的增加によるものである」と。是等の結論は數としての人口現象をそのまま觀察した丈けで得られる結論である。しかし、此の密集の巨大集群は、其の結果を生み出すか。と云ふ事に到ると、も早や、統計學、人口學の云々すべき所でなくして、社會學、社會心理學の領域に入つて来る。又、吾々は、大都會の人口の實數も知り度いには相違がないが、更に知りたいのは、この密集の巨大人口群から「どんな現象がどう云ふ風に生ずるか」と云ふ事に就いてである。「數百萬を以つて其の人口を算ふるメトロポリスはどうして、世界的に僅かな存在なのであるか」を知り度いのである。假りに女性人口の比率が大である、中年々齡者が弱、老年々齡者よりも、都市に於いて比率的に多いとするならば、其の原因の何たるやを、其の結果の何たるやを確かめたいのである。同様にして、市民の高死亡率、低出生率なども其の原因と結果とを探索したいのである。

されば、是等の希望を以つた人々には、どうしても、社會學的、心理學的、衛生學的、經濟學的、政治學的解説なり説明なりが必要となつて来る。反對に「純粹の都會人は三代以上に續かぬ」と云ふ、從來の諺の有効性を立證する爲めには、其の原因理由の如何を云々するに先立つて、出來得る限り、科學的方法を用ひて、統計學的人口學的研究を試む可きである。故に統計學的人口學的調査及び研究は、ある明確に測量し得る現象の實在に關してのみ又科學的に嚴密に規定せられた有効である。しかし、それ以上に亘つては、他の科學の領域に於いて註釋説明が行はれる。其の依つて來る可き原因が探求せらるゝ。是等の領域に於いては、人口は、最早單なる數としてのみ現は

れない。或る特定の心理型式、ある特定の社會關係、ある特定の經濟關係、ある特定の政治關係に於けるものとして現はれて来る。即ち都會現象に就いての限りに於いては、是等の人口は、ある特殊のものゝの綜合として現はれて来る。質的のものとして現はれて来るのである。

此の單なる數量としての現象より離れて特殊の質的としての人口現象の考察を中心とするものが最近の都市社會學の研究である。都市社會學は、都市人口現象を或る、社會學的に特殊な質的關係に於いて考察する。此の社會學的考察が、心理學的考察と、經濟學的考察とに分れてゐる事は、本誌前號の拙稿に於いて簡略に述べてゐる。其處では心理學的な形式社會學的な都市研究に對して經濟學的な發展形體理論的社會學的な都市研究を對立せしめておいた。本稿に於いても、之れと同様な立場をとつて、都市構成要素中其の人的要件について先づ人口學的な、數量的な考察に始まる。而して之れを批判する内に其の質的考察の重要なるを明かにし經濟學的發展理論的研究へ進む可き道を示さうとするのである。

二

人口學的に觀察して現代の代表的都市を求めらば、吾人は其の例をニューヨークに採る可く躊躇しない。誠にニューヨークこそは、現代資本主義社會に於ける典型的都市中の最も典型的なるものである。今、人口學的に此の巨大都市が如何なる構成を持つてゐるかを示し、次いで、他の大都市、殊に我が東京に於ける數字を示してみたいと思ふ。

東京市域擴張を祝福する昨今に於いて、世界大都市の比較は既に充分に、紹介せられてゐた。今之れを反覆すれば、

人口數に基く順位	順位	人口	調査年次
ニューヨーク	一	六、九三〇、四四六	一九三〇
東京	二	四、九七〇、八三九	一九三〇
ロンドン	三	四、三九六、八二一	一九三一
ベルリン	四	四、三三三、〇〇〇	*一九三〇
シカゴ	五	三、三七六、四三八	一九三〇
上海	六	三、一五〇、七一六	*一九三〇
パリ	七	二、八九一、〇二〇	一九三一
大阪	八	二、四五三、五七三	一九三〇
モスクワ	九	二、四二二、三〇〇	一九三〇
ブエノスアイレス	十	二、一一六、〇〇〇	*一九三〇
ウィーン	十一	一、八三六、〇〇〇	一九三〇

備考 本表は雑誌「都市問題」第十五卷第四號「大東京記念特輯」によつた「世界大都市の人口と面積」二六頁(但パリ

の人口丈は、The Statesman's Yearbook 1932 によつて修正した。前雑誌の數字は一九二六年人口で二、八七一、四二九であるから左迄著しい相違はないけれど、尙ほ基礎調査は國勢調査で*印丈が推計人口である。

既に述べた様に都市の大サや規模は先づ第一に人口で計れる。故に大人口を持つと云ふ事は、其の都市の威容を示すものとして素朴な優越感を満足せしめる。此の人口數に於ける筆頭はニューヨークである。しかしロンドンに就いては County of London 地域内の調査であつて、面積に於いて東京は其の約一・八倍、ニューヨークはその約二・六倍である。故に最近の大都市發達の狀況から見れば、此の三都は必ずしも、都市測量に於いては、同一の水準を以つてしてゐるものと思へない。其れ故に、三都、殊にロンドンとニューヨーク及び東京との間には、人口計算に於いても修正を必要とするであらう、試みに人口密度に就いてみるならば、一萬坪當人口密度はロンドン一四八〇、東京一、二九七、ニューヨーク二八六であつて、面積に於ける比率と逆になつて、ロンドンが東京の約一・六倍、ニューヨークの一・七倍弱となつてゐる。故にカーペンターの云ふ如く、ニューヨークは世界最大の都市と云ふ事は、或ひは主張し難いかも知れぬ (Carpenter: Sociology of Cife Life, p. 156) 殊に上表に於けるパリ市の人口の比較的少ないのに就いても次の事情を考へておく必要がある、即ち面積に於いてはロンドン市よりも更に少く、其の九一、六三〇、二七五坪に對して二六、〇八一、五五〇坪であるが故にロンドン市の約二割八分強に過ぎない、従つて其の密度も一番大で、一萬坪當り一、一〇二人の巨數を示し、ロンドン市の密度の約二・三倍にあたつてゐる。(註)

註 行政市區パリに對し大パリの地理的區域は先づセイヌ縣であらう、此の人口は一九三一年四、九三三、八五五で面積は一八五平方哩(約四八〇方呎)である。

大ロンドンの人口は、上記の行政区ロンドン市に對して地理的ロンドン市は八、二〇二、八一八に達してゐる、面積はチャーリングクロスを中心とした十五哩半徑圓六九三方哩約一八〇方呎に及ぶ、此の數を以つてすれば、世界大都市の順位は

一、大ロンドン 二、ニューヨーク 三、東京 四、大パリ

となる。(Salesman's Year Book, 1932 及び今井登志喜氏「江戸の社會史學的一考察」社會經濟史學昭和七年十月號による)

ニューヨーク市に就いて見れば既に一八七〇年代に百萬の人口に達し一八九八年マンハッタン、ブルックリン等五區を合併して今日のニューヨーク市を構成した、其の五區とは Manhattan, Bronx, Brooklyn, Queens, Richmond である。由來貿易港としての重要な意義を有し、合衆國の港灣首位としては既に一七八三年に其の地位を確保してゐた。今日、一九二六年の統計によれば外國貿易全國總噸數の二割一分、其の價值總額の四割二分を占めてゐると云はれる。一九二七年同市に於ける工業生産物の總價格は五、七二二、〇七一、二五九弗に達し全國總價格の九分を占め婦人衣服、男子衣服の製造を筆頭に、新聞紙雜誌印刷出版、毛皮製品、書籍印刷出版、パン其他製造、屠殺肉罐詰業、婦人帽裝身具製造、電氣器具製造、煙草製造等が其の十大産業である。

然し乍ら人口の巨大集域として驚く可き現象は、此のニューヨーク市を中心とした大ニューヨーク市地方の數字である。一九二七年の合衆國々勢調査局に於いて定義せられたメトロポリタン・ディストリクトは、New York, Connecticut, New Jersey の三州に跨り三・七六八平方哩(約九千七百方呎)を有し、一九二六年の總人口九、四七二、五〇

〇に達してゐると云はれる。此のメトロポリタン・ディストリクトの中に加へらる可きニューヨーク市以外の重なる市及び其の人口を掲ぐれば

New Jersey		New York State	
Newark	442,337	White Plains	35,830
Paterson	138,513	Mount Vernon	61,499
Elizabeth	114,589	New Rochelle	54,000
Bayonne	88,979	Yonkers	134,646
Hoboken	59,261		
Passaic	62,959	Connecticut	
Union City	58,659	Stamford	46,346
East Orange	68,020	Norwalk	36,019
Perth Amboy	43,516		
Orange		
New Brunswick		

以上の重なる人口及び産業中心地の人口總計は略百四十五萬に達してゐる。此のメトロポリタン・ディストリクトの規定は國勢調査局に於いて次の標準の下に行はれたものである。即ち

『一般に隣接地域を含めて、都市は、其の中央都市の外に、中央都市境界外十哩以内の地にある、凡べての市、町、村又はその他の地方團體を包含するが、メトロポリタン・ディストリクトなるものは之に反して、中央都市の外

に、十哩圏内の諸區域の内にあつて、最近の人口調査の結果一平方哩少くとも一五〇人の密度を有するもののみを含む地域を指す』

此の標準によつてニューヨークを眺めると同市部人口は一九二六年には五、九二四、一三八、之れを中心としてメトロポリタン・ディストリクトの總人口には、七、九一〇、〇〇〇となり、其の面積はニューヨーク市の一九一、三六〇エイカー(約七七四方籽)に對して七五一、八八七エイカー(約三〇四二方籽)となり、ニューヨーク市々廳を中心とする半徑約四十哩に及ぶ大圓を構成し、三七三の地方公共團體を包含してゐる。(註)

註 以上の數字はブリタニカ百科辭典第十四版ニューヨーク市の項及びアンダスン・リンドマン共著「都市社會學」によつたものであるが、メトロポリタン・ディストリクトに關する人口及び面積に就いて上記の様なヒラキがある、即ちブリタニカに於いては、面積が三七六八平方哩(約九千七百萬方籽)とあるに對し、ア・リ兩氏に於いては七五一、八八七エイカー(約三〇四二方籽)とあつて、後者の計算に著しき減少を示してゐる。人口數に於いても前者は推計人口九、四七二、五〇〇なるに對して後者は七、九一〇、〇〇〇として約百五十萬のヒラキを窺はせてゐる。恐らくメトロポリタン、ディストリクトに就いての限定の境域を不同にしてゐる爲めであらう。生憎調査數字が平方哩又はエイカーによる不同不統一を示してゐるので、比較計算上著しく不便であつた。なほ、目下手元に之れを確かむ可き材料がないので、煩雜なる數字を慎重に取扱ふ可き餘裕がないので、双方を記して、他日の更正に俟たんつもりである。(ブリタニカ第十六冊、第三七一頁、「都市社會學」第四六、七頁)

しかし更に近く有名となつたのは、大ニューヨーク市地方計畫の基底となるものであつて、其の地方は、五、五二

八平方哩(約一四、三〇〇方呎)半径五十哩の大圓圈を構成する廣大サを示し、尙四百二十の地方公共團體を包含し其の人口既に一千萬に及ぶとされてゐる。北米合衆國に於ける一九三〇年の總人口は一二二、七七五、〇四六であるが故に、同國に於いては十二人に一人の割合で大ニューヨーク市の勢力圏内に生活してゐる事となる。大ニューヨーク市地方計畫は一九二九年の發表になるもので一九六五年を期して半径五十哩の大地域に人口二千萬人の大都市地方を建設しようとするにある。(「都市問題」第九卷第五號、大ニューヨークの都市計畫—鈴木連三氏譯、参照)

二千萬の人口が果して可能なりや、其の實現は如何、と云ふ問題を離れて、現在既に千萬の數字を眼前に有するのである。ニューヨーク都市計畫委員會の仕事は此の老なる巨大都市の計畫に如何に重要な意義を有するか、それは別問題として、其の基礎資料及び研究は、大都市研究者にとつて貴重なるものと云はねばならぬ。

然らば斯くの如き巨大都市は、我國に於いてはどうか。今、簡単に之れを調べてみよう。

今回の東京市の隣接町村併合以前に於ける一般の都市統計は、既に述べた理由によつて、必ずしも、各都市の社會的實情を物語つてゐるものと思へなかつた。即ち我國に於ける六大都市順位は左の如し。

大都市	人口(昭和五年)	面積(昭和六年)
大 阪	二、四五三、五六九	一八五、一三方呎
東 京	二、〇七〇、五二九	八三、八三
名 古 屋	九〇七、四〇二	一五一、〇四
神 戸	七八七、五九六	八一、九〇

京 都	七六五、一四二	二八八、六五
横 濱	六二〇、二九六	一三三、八八

備考 京都市は昭和六年四月一日隣接町村併合を行つてゐる、故に人口數は次の如く變化して來てゐる、新市部人口一八七、二五五を加へて、九五二、三九七、之れが今回東京市擴張以前に於ける數字である。

即ち面積に比較してみれば、人口數字の相對的意義を推測する事が出来る。殊に各都市が市域擴張によつて得たる數字の増加を示めば次の如くである。

大都市	擴張年次	併合市町村數	擴張市域面積(方里)		増加人口數	
			増 加	現 在	増 加 數	前年度人口數
大 阪	大正十四	四四	七、三〇七	一一、〇〇三	七八二、八二〇	一、四三一、五〇〇
東 京	大正九	一	〇、〇七八	五、二一〇	一五、〇〇七	二、三五九、六三六
名 古 屋	大正十	一六	七、二一三	九、六五六	一八〇、八六七	四三二、三四九
横 濱	昭和二	九	六、二四〇	八、九九〇	一一〇、〇〇〇	四一二、五六三
神 戸	大正九	一	一、〇四三二	—	二三、二四九	—
	昭和四	三	一、五九二	五、三一〇	六〇、八〇四	六六六、七〇〇
京 都	大正七	一六	一、五六三	—	九七、六四二	五六二、八四七
	昭和六	二七	一四、七九七	一八、七四一	一八七、二五五	七六五、一四二

大都市の人口學的考察の限界

故に六大都市中、東京を除く五大都市は市域擴張によつて其の當然含まる可き都市人口を其の内に含んで數に於ける擡頭を示した、反之東京は今年迄遂に當然行はる可き擴張を行はなかつたのである。即ち市部人口は東京市にあつては二百萬を以つて限度として増加を見てゐない、反之郡部人口は著しい膨脹を示してゐる。従つてかくの如き都市統計は實際の情勢を知る爲めには、何等かの方法によつて修正されねばならぬ。「東京市市政概要」に於ける大東京の面積及人口「昭和七年版一七頁以下」東京市政調査會編「日本都市年鑑」昭和六年に於ける「大東京の人口」「東京市隣接五郡の人口増加」「東京附近人口五萬以上の町の人口増加」「各市都市計畫區域人口」等々(六八三頁以下及、六五六頁参照)は此の意味に於いて重要な統計である。

	大正九年		大正十四年		昭和三年	
	實數	指數	實數	指數	實數	指數
東京市	二、一七三、二〇一	一〇〇	一、九九五、五六七	九二	二、二一八、四〇〇	一〇二
郡部八十四箇町村	一、一八四、九八五	一〇〇	二、一一三、五四六	一七八	二、六六一、九〇四	二二五
計	三、三五八、一八六	一〇〇	四、一〇九、一一三	一一二	四、八八〇、三〇四	一四五

金谷重義氏「大東京の人口異動」による、「都市問題」第九卷第四號。茲に掲げられた郡部八十四箇町村は東京市計畫區域内のものである。

是等の統計の示すところによると、舊東京市の隣接地域には、二百九十萬に近い人口があり、舊東京市の二百七萬を約百萬近く凌駕してゐる大人口群が存在してゐるのである。

東京市	八三、八二五方軒	二、〇七〇、九一三人
郡部計	四六九、〇二九	二、八九九、九二六
總計	五五二、八五四	四、九七〇、八三九

此の最後の數字が新東京市當局及び市民をして世界第二位を誇らしめる數字である。昭和五年國勢調査速報による我國內地人口の總數は六四・四四七・七二四であるが故に約十三人中の一人が新しい東京市の市民たる割合を示すのである。此の點又大ニューヨークと比肩するものとして東京市民の誇る可き所ではなからうか(?)なほ内地の市部人口と郡部人口との割合は次の如くである。

	大正九年	昭和五年
市部	一〇、〇九六、七五八(一八%)	一五、四四二、二二五(二四%)
郡部	四五、八六六、二九五(八二%)	四九、〇〇五、五〇九(七六%)

右數字の中より、今回東京市に編入せられたる人口約二、九〇〇、〇〇〇を郡部より市部人口に移動せしめるとすると、兩者の比は二八%と七二%となる。

此の市部人口千八百萬人の中、大東京は五百萬として全市部人口の二割七分を占むる事となり、更に大東京市地方區域内にある横濱市川崎市の全人口を合算すれば、約七十萬を加ふる事となり、全市部人口に對する割合は三割一分六厘となるであらう。大東京市地方區域は、何處を以つて其の境界とすべきやは、未だ俄に決定し難しと雖も、

七百萬前後の人口を獲るは困難でなからう。此の問題は他の機會に譲るとして、要するに、巨人都市の存在に就いては、未聞の現象と云はざるを得ない。茲に於いて、當然其の都市の内部に、其の都市の近接地に、其の市民生活に、文化現象に、社會様式に、特殊の事象を生ぜしむるは不思議ではない。次には先づ、此の數の驚異による解釋を研究してみたい。

三

以上示すが如き巨大なる數字は、明かに人口學的研究對象として堂々たる存在である。しからば、人口學的研究は、此の數量から如何なる結論を導き出すか、今、此處に、一般の場合に就いて、此の點を考究してみよう。

人口學的因子となるものは、人口の大サ及び密度の大小である、人口の質的方面は民族學人種學等の論する所となつて茲には取扱はれないのである。而して此の人口學的因子を重要な社會過程の説明に役立つ基調たらしめんとする企に社會科學上に於ける意義がある。此處に「現代社會學の諸學說」の著者ソロキンによつて、其の派の代表者として掲げられたのはアドルフ・ゴスト Adolphe Gode であるが、今茲に便宜上彼の社會進化及び現象に關する所説を窺ふ事とする。

彼に従へば社會的事實は一定の直線的順列によつて進化的階段を經過するものであつて、是等は主として人口の増加及びその密度によつて決定せらるゝものである。人口が増加し、一層集中化すると共に、社會的分化と組成が増加し、茲に進歩的な社會機能の分化、社會狀態の平等化が招來せられ、政治的には專制主義より權力分立へと發

達し、經濟的發展は、神經筋力的努力から方法學的組織を有する機械的生産へと現はれ、信仰の進化は多神論的宗教から合理的科學へと進む。之れを詳しく云へば、次の如くである。

社會の歴史的發展階段を五期に分ち其の標準を人口集團及び集中の程度に求める、其の五期とは (一)村落時代 (二)諸村落上位の地方都市時代 (三)諸都市上位の中央都市時代 (四)諸中央都市上位の國都時代 (五)諸國都市上位の聯盟中心時代である。吾々の言葉を以つてすれば (一)非都會時代—村落時代 (二)都會時代その内に(イ)都市經濟時代—地方都市時代(ロ)領域都市時代(ハ)國都時代(ニ)國際都市時代と分類する事が出來よう。是等の發展は人口の發展即ち人口集中の増加と共に人口總量の増加を本體とするものである、又全社會的發展であると共に其の中心即ち都市形體の發展でもある。而して其の各時代はそれ々々(A)社會的活動の分化的進歩及び其の特徴(B)社會的結合の形態と不平等減滅への傾向と云ふ二方面に各、の特色及び進化を示すのである。以下の摘要中(A)は社會的活動の分類(B)は社會的結合形態及び不平等性又は平等性を示し(イ)は政治(ロ)は宗教(ハ)は經濟を示す。

一、村落時代(非都會時代)

A 社會的活動の分化を缺く

B 家族的專制と出生に基礎をおく支配

二、地方都市時代(都市經濟時代)

A 機能的分化—(イ)軍事的政治、(ロ)社會的形態學的多神論的宗教、(ハ)家族生産、

大都市の人口學的考察の限界

B 軍事的宗教的支配、種姓、唯一の財産制即ち土地財産制
三、中央都市時代(領域都市時代)

A (イ)軍事的及び法治的の兩權力。(ロ)有神論的及び一元論的宗教、並びに數理科學が之れに加はる。(ハ)家内工業、製造工業及び商業

B 君侯及び其の官僚に具體化されたる國家支配、階級及び特權、財産制度は土地及び資本
四、國都時代

A (イ)三權の分立、即ち軍事、行政、立法。(ロ)半合理的宗教、數理科學及び自然科學。(ハ)家内工業、製造工業、機械工業及び改善せられたる運輸交通。

B 個人主義に基礎を置く富の支配並びに相續及び教育の不平等、財産制は土地、資本、動的有價物
五、聯盟中心時代(國際都市時代)

A (イ)四權の分立即ち軍事、行政、立法、司法。(ロ)合理的科學即ち數理、物理及び生理の諸科學、(ハ)前時代のそれに加ふるに生命力利用による生産(vivifaction)

B 自由結社の支配、智識支配への傾向及び個人に對する平等的保護、財産制は前時代の諸形式に更に發明及びその分前に對する特許權を加ふ。

以上の段階は一定の繼續序列を有するものであつて、此の直線的進化は常に社會的機能の進歩的分化、自由なる

協働の増加、不平等に於ける漸進的減退等の歴史的傾向を辿るものである。而して、此の基調となるものは人口の増大と共に其の密度の増加であつて、動物の世界は其の世界が數的に制限せられてゐるが故に停滞してゐる。人間社會は、其の大サ及び密度が不斷に増加しつゝあるが故に進歩的である。此の現象は、接觸の増加及び其の強化、經驗の交換及び其の世代的累積と傳統とを生ぜしめる。世界に於ける最初の組織された大社會は、人口の集中が大であつた所、ニイルの谿谷、印度、支那、カルデア等に於いて初めて現はれた。希臘文化も之れと同じ理由に基き、バビロン、エヂプト、ローマの軍事的大統一も人口の夥多及びその緊密なる社會組成と云ふ同一因子によつて可能とせられた。反對の現象をコストは羅馬帝國の瓦解、中世初期の歴史に見出すのである。

故に一社會の成員の數的增加は其の全體的進化の主要原因である。統合せられたる人口の増加は社會的分化の増進を導き、勞働及び社會的才能の分業を生じ、社會の各部分の交通を促進し、個人的活動のよりよく且つ一層有力なる組成を可能ならしめ、自然法則の統一の表現をより一層正確ならしむるものである。土壤、氣候、人種等によつて人間の集合が促進又は妨止せられる事もあるがそれ等は社會的進化の主要原因ではない。

斯くの如くして色々の社會の相對的勢力を測る、コストの考察になるソシオメトリカなるものは、社會性の基調としての人口集團と密度を基本とするものであつて、人口數と人口集中又は全人口に對する大小都市人口の割合を以つて測る人口密度とが計算の根據となる。之れに基いてコストは、第十九世紀末の現在人口を基礎として世界大國又は小國の國力指數及び社會性指數を算出し、佛蘭西一〇〇に對して、大英國は國力指數一五五、社會性指數一五

二、獨逸は、一二二と八九、北米合衆國は七〇(或ひは七四)と四四、露西亞は一三六と四九、日本は七三と六六、其の他埃匈國、伊太利、土耳其、西班牙等の合計十大國について各、其の指數を算出し更にその平均國力數指を九四、平均社會性指數を七一と算出してゐる。白耳義、和蘭、瑞典、威諾、羅馬尼、葡萄牙、瑞西等の六小國の各、平均指數は二三と八二と計算されてゐる。此の基礎的計算式となるものは、次の様である

社會力 (Social Power) = 人口總數 × 社會性 (Sociality) (密度)

A. Cost: Les principes d'une Sociologie objective. 1899.

〃〃 : L'experience des peuples et les prévisions qu'elle autorise. 1900.

本項は前記の Sorokin: Contemporary Sociological Theories. Bio-social Branch: Demographic school 359-366 によつた。

四

コストの學說以外に人口數量とその變化とを社會現象の説明に結びつけるもの少なくない。唯コストの場合に於ける程、綜合的包括的でなく又第一義的でない丈で、斷片的部分的には社會現象の人口學的説明理論は決して乏しくなく。一例として前掲のソロキンによつて掲げられた項目を一瞥すると

- 一 人口數及び密度と生命作用との關係
- (a) 死亡率 (b) 出生率 (c) 人口増加
- 二 人口數及び密度と移民との關係

- 三 人口學的因子と戰爭
- 四 人口學的因子と革命
- 五 人口學的因子と經濟現象
- (a) 生産技術 (b) 所有權の形體 (c) 經濟的繁榮
- 六 人口數及び密度と社會組織との關係
- (a) 社會的分化、階層、分離 (b) 家族組織
- 七 人口學的因子と政治—社會制度の形體との關係
- 八 人口數及び密度と風俗習慣との關係
- 九 同じく觀念形態との關係
- (a) 言語の進化 (b) 宗教、神祕主義、拜物教 (c) 平等主義的觀念と運動
- 一〇 人口學的因子と社會盛衰との關係

然らば是等の諸項目に就いて人口學的に何が物語られるか、人口數の大小は兎に角、其の密度は、吾々都市研究者にとつて研究上重要な因子であるが故に、斯かる方面への一考も決して徒爾ではあるまい。以下其の諸點を簡單に紹介すれば、(此の項 P. Sorokin: The Contemporary Sociological Theories: Bio-social Branch; Demographic School. 274g)

人口の大サ及び密度と死亡率の關係——兩者間に積極的相關々係ありとの説、又は少くとも他の條件にして不變なれば、人口の因子の變化は死亡率の増減を正比的に惹す傾向ありとの説

人口の大サ及び密度と出生率との關係は、反之、逆比例的なる事、即ち人口の大にして密度大なる場合には、然らざる場合に比して、出生率の減少を生ず、即ち兩者の關係は逆比例なりとの説

従つて人口増加と人口の大サ及び密度との關係に就いての法則は、上記の兩命題の立證の如何によつて決定される、即出生、死亡兩率に對する人口學的因子の關係を上述の如くに解釋すれば、所謂人口増加に關する並行説が成立する、即ち人口増加(人口の大サ及び密度の増加)は相反する二作用を並行的に發生せしめる。稀少人口は出生率を大にして人口増加を伴ひ之れによつて生ぜざる夥大人口は出生率減少、死亡率の増大を促して人口増加を抑制する。

人口の大サ及び密度と移民との關係——(一)同一社會の歴史中にあつては、人口密度の急激なる膨脹期は、其の後に此の社會より出る移出民の増加、之れによる他國領域に對する強度の植民化を伴ふ。密度に於ける停滞又は減少の期に後續して此の國よりの移出者は減少し時としては他地方より移入民を招來する期間が發生する。(二)一般的規則として移住の潮流は、急激に増加する人口領域(又はより大なる效果的多産力を有する人口領域)より

増加力の劣弱なる領域へと流れる。

人口學的因子と戦争との關係——一領土に於ける人口増加は其の人口が過剩となつた場合、植民によつて其の作用を軽減緩和せしむるが、時としては、此の作用は戦争を生み出す原因となる。戦争は人口増加の效果的防止作用の一つである。人口學的要因は、經濟的擴張を要望して戦争の必然的原因となる。

人口學的因子と革命——人口學的過程に於ける強度の動態期は同時に著しき心理的變動、革命、內的危機の時期である。

人口學的因子と經濟現象——

(一)生産技術との關係。人口の増加密度の稠密は生産技術の改良進歩、生産形式の集約化の原因となる、即ち社會的進歩、文明は人口の數量的増加の所産である、或ひは密度大なる人口は技術を一層發達せしめ、人口密度小なる社會は技術的發明に乏しい。

(二)人口學的因子と所有權財産權との關係。人口稠密なる社會に於ける經濟上の所有權關係は私有制度が發達し、其の反對の場合には共有制が支配してゐる。

(三)人口學的因子と經濟的繁榮との關係。商工業の發達、生活標準の向上、經濟的福祉の増進は、人口の密度の増減に關係せしめられてゐる。一般に云ふ經濟學上の人口學說又は法則。

人口の大サ及び密度と社會的組織の形體との關係——

(一)人口學的因子と社會的分化、階層、分離。人口の増加又は密度の増加は、社會的分化を伴ひ、更に社會的階級或ひは身分等の階層を構成せしめ、社會的分離を發生又は増大する。即ち一方には地理的聚落的分業、他方には機能的分業の發達が以上の人口學的因子に關係づけられて説明される。

(二)家族制度との關係。婚姻形式又は家族形態の變化を人口的基數に於いて説明する。例へば、族外結婚、一夫多妻制、入夫制婚姻形態等は「社會群の數量的弱サを示す、蓋し其等はいづれもその社會の人口増加策に外ならぬから。

政治的社會的制度和人口學的因子との關係——專制、民主制、王制、共和制等の政治的形體、及び奴隸農奴、自由階級、封建制、平等社會等の社會的制度を主として、人口の大小、密度の粗密によつて説明せんとするもの。

人口學的因子と發明及び慧智との關係——人口及び密度の大は發明を促し天才を生む原因であるとなす説

風俗習慣と人口學的因子との關係——風俗習慣は社會的に制約せらるゝものとして、性交、妊娠、出生、死亡等に關するそれ等は人口學的因子に基くものと考へられる。嬰兒殺し、墮胎、一妻多夫、結婚延期、妊娠豫防等に關する諸風習は人口多又は過剩の社會に於ける存在である。即ち人口學的因子は如上の現象に關しては或る程度迄、道德、法律、宗教、其の他の行爲の性質を決定する。

人口學的因子と觀念現象及び形態との關係——

(一)言語の發達は人口的現象に關係せしめられる、即ち人口稠密、集團の大サ、個性の異雜性等益々増大するに連れて社會的經驗の量に富み、知的生活のより充實する事となり、言語の發達進化に關聯せしめられる。(二)宗教神祕主義拜物教との關係。人口粗小なる社會の心理はより宗教的にして神祕的、拜物的であり異雜性が少ない。人口の密大となるにつれて非宗教的、實證的、異端、個人主義、異雜性が現はれる。(三)平等論的觀念及び運動は、人口の大サ、密度、異雜性、流動性に其の發生及び成長の因子を有する。

人口學的因子と社會盛衰との關係——社會の興隆又は滅亡、或ひは其の時代的反覆を人口現象に據つて説明する、例へば人口稀薄にして密度の粗小な時代に於いては國內の社會的差違著しくなく其の増殖力も大であるが、

かくして人口増大し密度漸く大となるや社會的階級的差違を生じ上下の階層に従つて増殖力に相違を生ぜしむるに至る。同時に人口過剰を告げ、人口の其の部分は戦争又は平和的手段を以つて國外移住を行ふに至る。故に此の期の社會的發展には強度の植民現象と領土擴張の戦争が特徴となる。而して國外的發展及び軍事に従事する分子は主として進取的強壯的多産的分子であつて、此の擴張的經過の内に社會はかゝる分子を失ふ事となる。心理的に云へば、愛國心、國民主義の旺盛な時代であつて、母國の爲めにする植民及び戦争の榮光讚美、著しき共同一致の精神に其の特徴を見出し、國民的感激及び興奮の前に個人的思慮の進んで犠牲にされる愛國的時代である。

此の時代に續いで衰退期に入る以前の文化爛熟期とも云ふ可きものが来る。即ち戦争又は植民によつて進取果敢而して多産的な分子を失ふた社會は人口の増加又は増加率に減少を來す事となり、更に確然と差別せられた上流階級の増殖力の莫大なる減少は、此の人口減少の趨勢を資ける。此處に於いて下層階級の増殖力は以前よりも低くはなつたが、それでも上流階級のそれよりも大である増殖力が、上流階級の生産力不足によつて生じた間隙を補ふ事となる。即ち人口増加の勢、止まると共に下層より上層に向く上昇運動は漸く盛んとなり、此の運動を妨げてゐた以前の障害は悉く除去されるに至る。社會は「民主的」になり、同時に人口増加の停止又は減少及び植民地搾取の結果、本國の經濟的福祉は増進し生活標準の向上を促し逸樂奢侈の風を生ず。文藝の興隆を生ずると共に、工業も幾多の奢侈逸樂の用途を助ける。斯くして工業化、都市膨脹、商業發展、人口の都市集中が其の特色とな

り、商工業的都會文化の時代を現出せしめる。

政治的には民主的となり、心理的には、以前の愛國的果敢勇猛軍事的の氣風は「小市民的」となり世界主義的平和論的風潮を生み出す。富及び貨幣に對する追求が能事となり、かくして經濟的文化の繁榮は社會をして「女性化」せしめたのである。

しかしその社會は此の時に於いて第三期の衰退期に入る。第一の徵候は農村人口の衰微であり、農業の衰亡である。農業人口の減少、従つて増殖力の減退、農業經濟の破綻は、都會工業の製品に對する需要を減少せしめ、都會に於ける商工業及び一般經濟的状況を悪化し所謂生産過剰を招來する。茲に於いて此の經濟界の悪化によつて最も痛切に影響される者は都市労働者である。他方にはかゝる社會には不生産的な年金其の他定収入寄食者が夥しい數に増加してゐる。政府は擴大した領土、植民地を維持する爲めに巨額の國費を必要とし、課税重壓によらざるを得なくなる。社會的危機、秩序紊亂、騷擾は此の期の所産である。階級闘争に熾烈となり益、社會情勢の悪化を募る。此の形勢に處して政府の干渉は増加し、經濟生活に干渉統制を加ふる事多大となるに拘はず、情勢の恢復を求め得ず、其の社會は遂に没落の淵へと辿る。

五

以上に亘つて社會現象に對する人口學的説明の概略を紹介した。人口學的社會學は、本來人口學的或ひは生物學的問題を説明すれば（出生死亡、人口増加率）社會體制も論じ（都市農村社會）政治現象も説明すれば（專制民主

制體) 經濟現象を解説し(分業論所有權論) 心理的精神的現象も宗教的文藝的問題にも充分なる説明を與へんとする(風俗論宗教論思想觀念の分析等々)。是等の大規模なる意圖に對して敬意を表はし得るも、其の所説必ずしも全部が肯綮を得たりとは云ひ難い。成程、是等の社會的諸關係諸現象は人口學的數量又は構成に何等か關係がある様に見える。例へば都市即ち人口密度の最高の土地には社會的には分業が盛んで心理的には非愛國的非郷土的で且つ世界主義的であり、政治上では表面的には民主的で、社會の決定的因子は主として經濟的で、其の上層構成として一般文化の諸機能も豊富である。死亡率は、動物による生物試験を行はなくても、密集地域に大である事は、充分なる根據を以つて考へられる。しかし諸事情斯くの如しと云ふを以つて、一定時に一定所に於いて並存してゐる諸現象はいづれも、其の一つに他の全部とを連絡せしめて解説し得るや否や。其の特定の社會の綜合的諸現象はA・B・C・D・E……Nに及んでゐるとする。此等の綜合的諸現象は何かの根本的一元的乃至は多元的或ひは主要な因子又は諸因子を源として發生して來たものであらう。所で此の諸關係が同時、同所に(或ひは偶然かも知れないが兎に角) 並存すると云ふ事だけで、A或ひはB或ひはその他のもの、一つ、即ちNは、他の凡べてに綜合的に或ひは部分的に相關々係に立つと觀察されるかも知れない。「同時に存在してゐるのだから、何等かの關係はあらう」と推察する事は勝手だが、かゝる素朴な社會觀察を以つて、ある一因子を捉へ來り、それによつて他の全部を説明せんとするは極めて無謀である。殊に人口學的な統計的取扱ひは、ある結論を有効ならしむる爲めには、其の前提に於いて充分なる社會分析が必要である。人口の大サ及び密度に於いての比較を行ふ場合に、吾々は正規的な社會を標

準に求めなければならぬ、例へば軍師團の駐屯地は其の人口及び密度が他の都會又は町と同一であつたとしても、全部の現象や諸制度施設を相似として見る事が不可能となる。従つて此の場合典型的な聚落形體は何であるかを充分に把握しなければならぬ。又人口密度は大體、行政區劃を基礎として行はれるが、之れが社會的經濟的の全一體の區域を示すものでない事は明かである、其れ故、行政區劃に基礎を置く統計法は、社會學的經濟學的知識に基く修正を必要とする。

斯くの如くして統計學的結論を有効に使用する事に當つては、當該社會の充分なる經濟學的社會學的分析を必要とする。此の分析に従つて、一社會に、實際並列並存する諸現象の中、何が重要な因子であり、何が偶然的因子であり、何が因果的原因であり、何が單なる並行的分子であるか、理解せらるゝ。之れは統計によつて援けらるゝ事大であるが、此の前提的な分析なくしては、現實社會の理解に統計の役立たぬ事、又分明である。故に、單に人口の夥大なる所、人口の稠密なる所に現はれた諸現象を、全部、人口學的因子によつて説明するのは不可である。並行的關係にあるものは、人口學的因子によつてその現象が數字的に表現されると云ふ事はある。しかし並行的關係は直に因果的關係ではない。人口學的因子のDと當該現象Xとは共に他のFなる因子によつて決定されて來るものであるかも知れない。更に又、逆な關係があるかも知れない、上述のX(即ち或る現象)が直接Dを決定してゐるかも知れない。茲に於いて三様の關係が成立する、即ち

DがXを決定する

XがDを決定する

D、X共に他の因子Fによつて決定されてゐる

かゝる複雑な事情を綜合して賢明なる研究者は、各因子の決定的關係を相互的として複合的關係を採用する。此處に屢述べた所のソロキン著書の如きは其の好適例である。

更に人口學的、統計的説明は、多くの現象を決定すべく、其れ自體としては、即ち數量的觀念としては、數の局限に於いて不明確なるものがある。普通人口二千人以上何千以下、二萬人以上何萬以下、三十萬人以上何十萬以下と云ふ等級別を行ふ。數字は其の表現があまりに明確過ぎる。故に吾々は現代大都市を人口百萬を以つて單位とすると考へるが、九十何萬の都市を以つて一大都市と考へるに躊躇しない。しかし統計的に見れば九十九萬九千九百九十九人の人口を有する都市は人口百萬以上の都市等級には入れない。従つて此の弊を除く實際の用途に當つては概數を用ふるの外はない。吾々の考へ且つ觀察する大都會現象なるものが人口百萬前後の都市に發生し流行してゐるが故に、吾々は百萬の近似數を以つて大都市の數的標準とするのである。

同じ事は、人口學的因子とそれによつて決定せらる可き社會現象との關係に就いても云ひ得る。數量に於ける一の増加又は減少は、一つの變化である。しかし此の變化は直ちに社會現象の變化に影響を及ぼすものとは云へない。従つて數に於ける變化にもある標準楷程を求めて來なければならぬ、又其の標準楷程に於いての凡べての變化が常に社會現象に於ける變化を伴ふとも思へぬ。此の變化の中の或るもの、丈けが社會現象に變化を生ぜしむる場合が多

い。同じ比率であつても、一萬の都市の人口倍加と百萬の都市人口が二百萬になつたのでは、其處に現はれる社會現象の變化は同一ではない。故に此の際「人口が多くなれば……となる」と云ふ常識に近い命題は成立するかも知れない。しかし「何程丈け多くなると……」に就いては概數丈けしか示し得ぬ場合が多い、例へば、一社會に於ける人口過多と人口過少との關係に於いて、過度の増加率は社會的不幸の原因となると共に過度の減少率も亦、同様に社會的不幸を招來せしめる。従つて、其の社會に就いての人口適度の標準を設ける事となり、一定の條件に於いて、人口の増減が此の標準を中心として動く場合に、其の社會の禍福を云々し得るに止まる。

更に宗教、倫理等の觀念的なるものを人口學的數字に於いて物語るは困難であると共に危險が多い。平等主義的傾向は必ずしも人口數の大小、密度の密粗によつて直接又は間接にも決定せられるものでもなからうし、よし又其の間に連絡がありとするも、以前に述べたるが如く、如何なる數量が平等主義的傾向を生むかは、直に回答せらるゝものでもなく、又二つの國を比較する場合、人口の多い方の國が必ずしも平等主義的傾向であるとも云ひ難い。要するに、人口學的因子は、社會の綜合的現象の一相であるに過ぎない。其の數量的變化は純然たる自己決定的ではない。人口増加のみが技術の發達を促すとは云ひ難く、逆に技術の進歩が人口の膨脹を許してゐる事もある。従つて人口現象はある他の現象を決定するかも知れないが其の關係が間接的な場合があり、又直接的なる場合にも、人口現象自體が上位の因子によつて決定されてゐる場合もある、即ちD（人口學的因子）はf（他の因子）を決定するが、D自身がF（上位の因子）によつて決定せられた結果としてfが生ずる場合もある。此の際Dとfと

の間には、直接にして他のもの、交渉を容る、餘地なき純粹關係が證明せられぬ限りDによるfの説明は第一義的のものたり得ぬ。例へば都會人口の年齢構成を見れば中年期に屬する人口が比較的が多いと云はれてゐ、而して此の事は出生力の旺盛を示すものであるからして都會の人口の出生力及び人口増加力に充分影響するものでなければならぬ。故に、他に此の出生力に影響を及ぼすもの、無い限り、都會人口の出生力に、其の年齢構成にも乍らず、充分なる實現を見ずとするならば、其の豫想出生力不實現は、或ひは人口學的因子即ち密集的狀態が出生力を減少せしむる作用によつて説明せらるゝかも知れない。しかし、之れが爲には、年齢構成と出生力不實現との間に他の障害——例へば經濟的必要による獨身生活、結婚忌避、産兒制限等（之れ等は人口學的要素によつてのみ説明せられるものでない）——の存在及び作用を排除せねばならぬ。しかし實際に於いてはかゝる排除は全然不可能であり、又寧ろ無意義である。鳥類獸類の實驗的密集試験より得たる其の生産力の生物學的結論は生物としての人間に當て嵌るかも知れないが、都市人口の生産力状況を説明する方法としては、餘りに單純過ぎてゐる。若し都市人口の出生力の豫想せらる可きものより低率なるを經濟的原因社會的原因に上つて説明するとして、更に之れを人口學的に妥當せしめんとするならば、出生力減少を伴ふが如き經濟的社會的原因は、必然に人口學的因子によつて優先的に決定せられたるものであると主張しなければならぬ。即ちfはFによつて決定される、FはDによつてのみ決定される、即ちD↓F↓fの關係が成立すればfは間接的ではあるがD↓F↓fの決定方法が必然的であるが故にD—fの決定も必然的である。此の際の例にとつて云へば「人口増加して經濟的生活に危殆を生じ、従つて消極

的積極的に人口の増加力減少する」と云ふ事となり、所謂マルサスの人口論に該當する事になる。しかるに同じ人口學的命題は人口増加と技術の發展との關係を許してゐる、故に人口増加は技術の進歩を伴ひ經濟的不安を必ずしも不可避的に導くものでないと云ふ事になつて、D↓Fの關係が決定的ならざるが故にD↓fの關係も亦必然的ではなくなつて来る。更に密集が出生力減衰の原因となると云ふ説に對しては、労働者階級の出生力及び其の實現が反對例を提出してゐるものとされてゐる。

以上社會現象に對する人口學的説明の不備に就いて説いて來た。此の不備の原因を吾々は、人口學的取扱が數量に就いてのみ終始する爲めであると解する。故に社會現象、今此處に問題となつてゐる都市社會の現象を理解するに當つても人口學的な數量的解釋にのみよる事の出来ないものが多い。既に人口學的に、人口の大、密度の大なる社會は、社會的分業、分化の大なるものと教へられて來た。分業、分化は質に於ける觀念である、百萬、五百萬の人口を有する都市社會は此の質の觀念を中心とする事なくしては理解し難い。而して人口學的には、五百萬の都市には社會的分化が著しいとは教へて呉れるが、どう云ふ分化があるかは、別に研究を要する所である。例へば都市住民の職業別、生活標準別、學識智能別等に就いては、最早人口學の領域内の問題でなくなつて來る。是等の各種の系統の各に就いては再び統計學的數量の援助を借りる事大なりと雖も、系統分類の方法は獨立のものである。人口學は、此の點、社會的會計學に過ぎない。以下、社會的分化を中心として、質の觀點に立つて、都市社會を一瞥

して、以つて人口學的考察と對比してみよう。

六

社會群態學は、生態學の一方法として生物學の中に其の一地位を占むるものであるが、其の研究は吾々に少くとも質的觀點に立つ觀方を與へたものと云つていゝ。何故なれば、生態學は生物の生活關係に於ける環境に對する態様の學問であるが故に、吾々は各種各類の生物を、各、特殊の生物として見る事が出来る。同様に社會群態學にあつても、吾々は人間を、人間と云ふ一般的型に於ける生物と見ないで、特殊の類及び種を持つたものと見る事が出来る。生物界に於いては各種各類の攝取する營養分は、或ひは異なり、或ひは其の攝取の方法を異にする。それ故に、一地域内に各種各類の生物が共同して共榮する事が出来、茲に一つの景觀をその地域に與へる事となる。

人間社會の場合にあつては、生命の維持に關する營養分に就いては全體に異なる所無しと假定しても其の攝取の方法に於いて異なる各種各類を見出す事が出来る。即ちその生活々動於いて、全人類は決して單一でなくして、複合的である。例へて云ふならば、現在の社會に於いての人間の營養素は貨幣價值である。之れは、大體に於いて各人に共通な營養素とみて差支ない。しかるに各人は此の營養素の攝取の仕方に於いて決して一樣でない。他人の攝取した養分を中途に於いて奪略するものがあり、他人に寄生するものがあり、或ひは既に充分なる養分を貯藏せる者があり、更に多くは自から攷々として此の養分の吸収につとめてゐる者がある。此の養分の吸収に務める者の中にも色々な生活機能が眺められる。土を耕す者、鑛石を採る者、魚を獲る者、物を造る者、運搬する者、使役せら

る者、人を娯ばす者、智識を授くる者、治療する者、精神を慰むる者……等々がある。之れ等はいづれも各々特殊の機能を發揮して其の營養素の攝取に努力してゐる。故に吾々は一般生物界にありて、動植物の間に共榮共存の實あるを見るが如くに人間の社會にあつても共榮共存の現象を見るのである。巨大なる喬木の群生より成る森には、其の下に灌木藪あり更に草叢を具へ、最下には蘚苔類の生長がある。内に各種各類の鳥獸を生棲せしめて、茲に堂々たる景觀(ランドシャフト)を現出してゐる。人間の社會にあつても巨大なる都市は之れにも比すべき堂々たる景觀である。中央政廳は、全國より收納せる收入によつて多くの人間を使役してゐる。商人は貨物の配給につとめんが爲めに蚶集する、工業家も製造貨物の便宜と勞働力市場の便とを計つて、人口の密集地に生活の基礎を置く。消費力の優勢なる土地に、教育、娯樂、其の他の機關が整頓し、之れに關係する生活者が集合する。都市はかくの如く、生物學的の事實であり、群生態である。都市は自然的景觀に對して社會的景觀である。

斯くの如き質的觀點に立つ觀方、社會群態學的研究は生物學—社會學—經濟學的態度である。此處に於いては都市人口の五百萬は、單なる數の五百萬として現はれないで、幾許かの類種の合成する、五百萬となつて現はれて來る。元來、此の現象は社會的分化、分業の現象であつて、從來都市社會の特徵的存在とされてゐる。スペイン、アメリカ、デューケム等の社會學者を俟つまでもなく、凡てが此の機能的分化及び分業を以つて社會的發展の傾向と目してゐる。スモールは機能的分化の傾向を逐つて「社會發展史」を書いた(Small and Vincent: An Introduction to the Study of Sociology. 1894. Natural History of a Society)。ソロキンは社會的分化を以つて都鄙社會の對照

的特徴の一にしてゐる (Principles of Rural-Urban Sociology)。アンダーソン——リンドマンは超専門化の弊に注意するを怠らなす (Urban Sociology. Over-specialization)。農村に於いては各種の生活機能が單一的に綜合されてゐる、之れに反して都會に於ける機能は極度に微細分化されてゐる。

註 スモールは前掲書中に於いて興味ある言葉を吐いてゐる。即ち、田舎の村落に於いて商業配給の機關は「萬屋」である。荒物屋である。一軒の店に於いて凡べての日用品が處理される商店である。しかるに都會が膨脹し、發展するに連れて、之れは一度は専門店に分化し専門化したのであるが、再び一經營の下に各種の配給種目が綜合せらるゝの現象、換言すれば田舎の「萬屋」式形態で再生して來た、曰く「百貨店」の出現である。誠に現在の百貨店は、昔の「萬屋」よりも、一層複雑な内容、商品を綜合したものである。若し一形態に綜合されたものが、非分化的非専門的と云ふ意味で田舎の村落的だま云ふならば「百貨店」は最も原始的村落的のものだま云へようではないか。しかし何人も敢てさうは考へぬ程、百貨店は都會的である。依然として分業的専門化的である。

例へば盛り場に於ける飲食店を調査するにあらゆる種類の喰物店飲物店がある。牛屋、鳥屋、天ぷら、そば、すし、蒲燒、日本料理、支那料理、西洋料理——特に又街にトンカツ店の如何に多き事よ——喫茶店、汁粉屋、おでん屋、バー、カフェ等々。而して又飲食店界の百貨店とも云ふ可き「食堂」なるものがある。斯くの如く「綜合」されてゐる事は必ずしも分化に反する現象ではない。「食堂」又は「百貨店」の綜合は、特殊商のそれと同じ丈の専門化の基礎の上に立つてゐる。専門的技術が獨立のものとして成立してゐれば、其れが自立的の特殊商であらうと又は、他の綜合的經營の一部門であらうと、其の差別は問ふ所ではない、従つて又其の専門的性質の融通性例へば一人が二種以上の種目の擔當者となる事も決して重要な例外ではない。各種目に對して獨立の専門的技術及び其の訓練が要求され、それ

に従つて人間が生活し得るならば、而して此の意味に於いての専門家が一般に承認せられてゐるならば、それで充分なのである。

現在に於ける專業化の實情を此の機會に於いて詳細に報告する事は聊か退屈である。産業又は職業統計が都市研究に於いて利用せらるゝに就いては、通常其の特殊性を示す爲めに、所謂、大分類が用ひられてゐる、即ち (一) 原始生産業 (二) 工業 (三) 商業 (四) 交通業 (五) 公務自由業 (六) 家事 (七) 其の他の産業、及び最後に (八) 無業。

是等の中(一)―(五)に至るものが細分再細分せらるゝのは明白である、今假りに内閣統計局の公にした「國勢調査」の結果表章ニ用フベキ産業分類及職業分類」を利用して其の中、小分類を示せば、産業分類に就いては

大分類	中分類	小分類
農業	五	一四
水産業	一	三
鑛業	二	五
工業	一六	一五〇
商業	七	五七
交通業	一	一三
公務自由業	七	三四
家事	一	一

其の他の産業
無業

一 一
一 二

全部を合計して中分類にして四十二、小分類にして二八〇を算ふる。同じく職業分類に就いては

大分類	中分類	小分類
農業	四	二四
水産業	一	四
鑛業	四	二一
工業	一四	二一三
商業	三	二四
交通業	二	三三
公務自由業	九	三八
家事使用人	一	二
其の他の有業者	一	八
無業	二	九
(計)	四一	三七六

更に是等の小分類の中に分類包含せらるゝ産業又は職業の實際形態に就いてみれば、同内閣統計局發表の示す所に従へば、更にその複雑性を増加するのである。例へば産業分類中大分類「工業、中分類(二四)―其ノ他ノ工業、

小分類(一六八)―文房具製造の中には四十三種名の實際形態が集められてゐる、同、小分類(一六九)―運動用具遊戯品玩具製造の中には四十九種名が綜合されてゐる、(前掲書、「産業分類各項目ニ含ム産業名例示」)是等の「産業名例示」を各分類の諸項目について詳細に述べる暇はない。以上によつて大體を豫測せられれば結構である。勿論是等の「産・職業名例示」は調査申告に對する整理の規準を爲すものであれば産業職業名の相違は必ずしも業務實體の相違を語るものとは考へられぬ。しかし乍ら前記の四十數種名の内には、適當に其の専門的技術又は職業部門を示してゐるもの少なしとしない。

所で以上の産業及び職業分類中、都會的のものと思はるゝものを掲ぐれば、工業、商業が、及び交通業、公務自由業も、特に都會的特徴を示すものとして掲げらるゝに論を俟たぬ。例へば舊東京市に就いて云ふならば、同舊市人口の産業及び職業的人口分布は次の如くである。(昭和五年十月一日現在、東京市市勢統計原表、第五卷、産業及職業篇上による)

全人口	二、〇五四、八七四
内 無業者人口	一、〇八六、五九四
有業者人口	九六八、二八〇

有業者人口の産業別構成

有業者總數	九六八、二八〇	有業者千人に就いての各業比
大都市の人口學的考察の限界		

原始生産業	四、六七七	五
工業	三一七、八四二	三二八
商業	四一八、二五七	四三二
交通業	四三、四二三	四五
公務自由業	九〇、七八四	九四
家事	八九、七七〇	九三
其の他	三、五二七	三

都會的産業及び職業である工業及び商業が前記國勢調査に關する職業及び産業分類中で最も多數の中、小分類項目を有するものである事は、前掲の數字に於いて明瞭であらう。

要するに機能的分化は、現在に於いて、技術的分業専門化と共に微細に亘つた事については、舉證の煩しさを犯す必要ない程、明瞭な事實と認め得る。唯吾々は、此の微細なる分業の結果、人間の生活々動及び其の過程が非常に複雑となつて來た事を認めればいゝ。米國の經濟學者パッテンの如く欲望の變化と複雑とに社會の進歩を認めるにせよ、認めざるにせよ、兎に角欲望の複雑化と共に之れに對する設施も複雑化して來た。この社會に於ける人々は、この複雑性の中のいづれにか取り附いて、其の生活を確立しようと努める。營養素の攝取に努力する。茲に於いて一地域内に色々の職業の分布配合による構成が生じて來る。かくして出來た一大都市及び其の各局部は一つの

社會的景觀となつて現はれるのである。

社會的景觀に就いては、吾々は通常何等深い意義に就いて知悉する事なくして、日常認めてゐるところのものである。大都市の風貌と云ひ町の姿と云ひ、皆、景觀に外ならない。下町、山の手、郊外に夫れ々の風貌があり色街、盛り場、學生街、職人町に夫れ々の景觀がある。社會觀察に就いて一方面を開いた今和次郎、吉田謙吉兩氏の「モデルノロヂオ」は此の點に就いて興味ある調査及び觀察を示してゐる。早稻田大學東京帝國大學及び慶應義塾大學をそれを中心とした學生街の調査―飲食、被服、學藝、娛樂等々に關して學生的交渉のある商店施設の分布配合の調査、銀座神田等の盛り場に於ける飲食店分布の調査等、それである。銀座一割に、如何に飲食店の多き。「モデルノロヂオ」扉圖參照之れによつて吾々は飲食に關する多種のサーヴイスが群生的に構成されてゐる事實を見る。食傷新道などと呼ばれる特別の形態を持つた一街、其處にあつては、同じく飲食に關する色々の店が密集的に生棲してゐる。此の事實は是等飲食店等に反撥的作用よりも寧ろ吸引的作用を相互に働かしてゐる事を雄辯に物語つてゐる。

盛り場に就いて云へば有階級の趣味嗜好に投じ其の他學生、サラリーマン、主婦、子女等々の需要に應じて、諸般の職業が群生する。故に商店の經營者及び其の他の者は其の經營上かゝる職業的分布又は群生態學的傾向に注目する事を緊要とする。敏感なる商人は既に、之れを、其の學理的説明なくして實行してゐた。近代の大規模な、合理的な商業經營法は此の方面の學理研究に充分の努力を惜まないであらう。

斯くの如くして分化は同時に組成である。以上の説明に於いて人間はその社會的關係に於いては最早單一、平等な數的單位として取扱ふの不可能なるを示して來た。しかし、以上掲げた專業的分化は徒らに技術的乃至は職業的分類に外ならなかつた。此の分類に基いて、都市研究は更に一步を進めねばならぬ。それは、技術的職業的構成

から更に進んで社會學的經濟學的構成に於ける質の研究へ入らねばならぬ。之れを吾々は次の機會に於いて考察したいと考へる。

量の範疇に就いて

——機械論並に數理經濟學方法論の批判——

奥田忠雄

吾々の感性を通じて直接主觀に與へられる對象の現象形態は單に質的規定性を有すにとゞまらず、同時に量的規定性をもつて現はれる。例へば直接吾々の感性によつてか、乃至は統計表、會社銀行の決算報告書、株式相場表等を見る(感性に訴へる)かによつて、資本主義社會の諸現象は、商品交換の量的増加、勞働者階級の遞増、資本蓄積の異常な膨脹、流動資本に對する固定資本部分の増加、利潤利子の低下、獨占の擴大、恐慌と不景氣期間の延長、失業者群の増大等々の量的規定性を有することを知覺す。

勿論これ等の量的規定性は、吾々の感性を通じて初めて知り得るものであるとは云へ、決して觀念論者や不可知論者の説く如く、單に純然たる主觀の創造物、主觀的範疇にとゞまるのではなく、それは對象たる客觀的實在そのものの一面を現はし、主觀はこの客觀的規定を反映して量なる範疇を設定するのである。何となれば、右に掲げた資本主義社會の量的規定性は、吾々主觀がそれを認識する与否とに拘らず、儼然と客觀的に實在し、吾々の生活はその客觀的關係の内に必然的に織り込まれざるを得ないからである。即ち量の範疇は客觀的實在の、一規定を反映する。